

作曲少女

仰木日向
イラスト
まつだひかり

《番外編》 はじめての 作曲コンペの話

COMITIA 127 夏布コピ本



「ホンキで言ってるんですか、先生……？」

電話越しに聞いた言葉に、あたしは驚きを隠せない。

「いや……でも、あたしそういうのやつたことないですよ……？」

もちろん、やりたいとは常々思っている。というか、そのつもりで曲をいつも書いていた。いつでも実戦に入れるように。”あたしだったらこうする“って思いながら。

「……いえ、やります。やらせてください。はい……わかりました。一週間ですネ」

——これは、中学3年生のあたしの話。

黒白珠美の、初めての作曲コンペだった。

「まいったな。どうしよう」

あたしは、ひとまず自分の部屋をぐるっと見回す。自分の身に起こったことがまだ実感として湧いてこない。

作曲コンペつてのは、音楽業界の主に音楽制作会社なんかでやりとりされてる『作曲オーディション』みたいなものだ。たとえばアニメやドラマの制作サイドから『主題歌を募集します』みたいな感じで、音楽制作会社にコンペの通達が来るといった具合に。

でも本来これは、あたしみたいな単なる一般の中3女子が参加できるようなものじゃない。コンペに参加するには、その音楽制作会社と関わりがあったり、所属作家だったり、いわゆる「コネ」が必要だ。だから、ありえるケースがあるとすれば今回みたいなパターン。『ある作家が保証人として、あたしに関する責任をすべて負うことでコン

ペに参加させる』という形。

先生は『決め打ち』といって、コンペではなく先生が作るということを決めた上で曲作りがスタートする、いわばシードみたいな立場だった。だから先生がコンペに参加するっていうことは基本的にないし、先生はコンペに対して実は良い印象を持っていないらしいけど、あたしがコンペに興味を持っていたことは覚えていてくれたらしい。

そして先生は、関係者に守秘義務とか（あたしはまだそのへん詳しくないんだけど）のことを色々はからつてくれて、今回のチャンスをくれたようだった。

「……おお、これが……コンペ情報か」

先生から送られてきたメールを開く。そこには、噂には聞いていたその都市伝説的なものが、実際に書かれていた。

コンペ情報には未公開情報が含まれる、とは先生から聞いていた。でもあたしが実際にこれを目にするのは、今回が初めてだ。なるほどな。

「あのラノベ、アニメ化するのか。へえ」

これを見て察する。先生がどういう責任を負う前提であたしにコンペの参加を促したのか。

嬉しがるの中学生なんかはこの情報を教えたなら、得意になってクラスメイトに話したりすることもあるだろうと思う。幸い（つて言うのもなんだけど）あたしはクラスに仲のいい友達はいないし、学校は行って帰るだけの仕事みたいなトコだ。あたしの楽しみはこの制作机の中にある。でももしも、あたしがそれなりに社交的ならこの情報を誰かに話したくなったりするのかもね。

万が一それをした場合に責任を取ることになるのは先生だ。先生は、そういう意味であたしを信

頼し、あたしの行動のすべてに責任をとってくれることにしたい。

音楽業界は基本的に紹介制だ。その理由は、つまりこういうことも含まれるんだろうと思う。その当然のエチケットを守るかどうか。仕事を放棄しないまともな人か。そういう人格的な点でプロであるという最低限のところから、その上で実力が伴っているかという部分をチェックして、「責任をとつてもいい」と思つて貰えたときに、今回みたいな参加するチャンスを得るということもある。

自分で言うのはちよつとダサいけど、先生はあたしを信用に足る学生だと思ってくれたんだと思う。実力はさておきとしても、最低限の部分で。

「……盛り上がってきたぞ珠美。これがあたしの望んだワールドだ」

その日に備えて、いままで色々曲を書いてきた

りはしていた。けど、実際にこうミッションを提示されると、やつぱり体の内側が湧いてくる。書いた曲が、場合によっては商品として世の中に出ることになるっていうこのゲームは、そろそろ次の遊び方を探していたあたしにとつて最高の新ステージ解放だった。

「『預言者マリンと円卓の騎士』……か。とりあえず原作ラノベ買ってこよ」

~~*~*~*~*~*

書店で買ってきたコンペ原作『預言者マリンと円卓の騎士』。これは、現代の女子高生マリンちゃんが中世騎士物語……つまりアーサー王伝説の舞台キャメロットにタイムスリップして、魔法使いマリンとして活躍するタイムトラベルSF作品だった（アーサー王伝説のマリンはおじいさんなんだけど、この物語に出てくるマリンは未来人で過去改変を目論む時空犯罪者ということに

なっていた。マリンちゃんはそれに巻き込まれた、みたいな）。

「なるほど。アーサー王ロマンスつてのはなかなか良いもんだな……」

原作を読んでみて、あたしは考える。これがアニメになるっていうことは、ふさわしい音楽も当然決まってくるな。アーサー王伝説にそぐう荘厳な感じも必要だろうし、現代女子高生のマリンの立場をあらわすポップなニュアンスも必要になる。

「……やばい、楽しい」

いままで、たとえばこの漫画に主題歌がついたら、とかそんなテーマで曲を書いたことは多い。けど、今度は実戦だ。モノによつては本当にこの曲がこのアニメの主題歌になったりする。それつてすごいよな。考えれば考えるほどワクワクしてくる。

「……うーむ。つていうことは、だ。どういうのにすればいいかっていうことをよくよく考えなきゃいかんぞこれは」

期間は一週間。一週間か。一週間もあれば3曲は用意出来そうだ。なんなら5曲？ いや、限界までやつてとにかく出し尽くそう。なんなら学校だって休もう。これは非常事態だもんな。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

と、いうわけで。あたしは一週間学校を休むことにした。パパとママを説得するのにはちよつと骨が折れたけど、理由を作曲コンペだなんて言ったらまず理解されないだろうと思つたので、大義名分は『受験勉強がしたい』にしておいた。あたしの猛烈な頑固さに呆れたらしいママは「一週間だけで、そのあと休まずちゃんと行くこと」を条件にあたしの限定不登校を許可してくれた。もち

ろん勉強なんかしない。つていうかあたしは高校に行く気だつてない。あたしのやりたいことはもう決まつてゐるしな。そんな寄り道をしてゐる暇はない。

「……ヘッドホンとミニ鍵盤さえあればこつちのもんだ。適当に教科書開いてそれらしく偽装してうんと曲書くぞ。この勝負はあたしの大事な初陣なんだ」

イヒヒつと悪巧みをしてクスクス笑うあたし。あたしつてやつはワルだな。なんかこう、それも含めてちよつと楽しい。あたしの冒険が始まりそうになつてゐる。もしこのコンペで勝てば、あたしはプロ作曲家の仲間入りだ。そこがあたしにとつて、一番自然な場所だとも思う。

そうだね。考えようによつてはこれは、あたしにとつての受験ともいえる。そういえば声優の沢城みゆきさんも、中学生の時点で声優オーディションを受けてデビューしてたつけ。だよな。そうなるよね。わかる。やりたいことがわかつてゐる人

は、そこに向かつて歩くのが自然だ。いつそれに気づくのかについては、きつと個人差があるんだろうけど。あたしにとつての自然は、この道の先にある。漠然とだけど、それこそあたしが先生の門を叩いたのも、無意識で実はわかつてたからなのかもしれない。こつちにあたしの故郷があるぞつて、直感的にわかつてたというか。

「……なんてことが単なるあたしの思い込みか、それとも実際にそうなのか、それをハッキリさせなきゃな。今回のコンペは、そういうものでもある」

ちよつと調子に乗つてゐる自分^{たしな}を心の中で嗜めつゝ、あたしは制作机に向かう。机には、偽装用の教科書にノートに、お菓子に、なんかそれらしいプリントとか辞書とかそういうのを雑に置いて、正面にはパソコンの画面とミニ鍵盤。オーディオインターフェースから伸びるヘッドホン。あたしの一週間の戦いが始まつた。

*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*ゝ*

「——で、どうなったの？」

「はは。それがなあ」

興味深そうな顔でいろはが聞いてくる。昼休みの教室。食べ終わつた弁当を風呂敷に包みなおしながら。

「コンペは落ちたよ。5曲書こうと思つてたけど、書いたのは2曲だった。でもその2曲はかなり会心の出来だったし、これはもう絶対いけると思つただけだな」

「珠ちゃんでも勝てないときとかあるんだね」

「あはは！ 勝てないとき？ そんなことばっかりだよしろ！ ちなみに言うとな、あたしはそれからもう狂つたようにコンペに参加するようになったんだけど、それから落ち続けた」

「え、そうなの？」

「そりやあもう。コンペなんて通る人いるのかつ

てマジで思つたよ」

「そうなんだ……やつぱり競争率すごいんだね」

「中でも印象的なのは、女の子向けアニメの主題歌の時だったなあ。あたしき、もうこれなら絶対に通ると思つた曲ができてき、でもそれが落選したときに、どうしても受け入れられなくてき。でも、誰にその不満をぶつけることもできないし……つていうかそもそも選ぶ人たちが誰なのかもよくわかんないしき。唯一連絡先がわかるのは採用された作曲家さんその人だけで、メールとかしたんだよね」

「ええ！？　なんてメールしたの！？」

「その作曲家さんはものすごい実力者で、曲も最高だった。その結果自体に文句は正直なかったんだ。でも、あたしのだつて良かった。自惚れかもしれないけど、同じくらい良かったと自分では思つたんだ。それでも選ばれなかったのがもう悔しくて、いてもたつてもいられなくて、あたしの曲を添付してその人にメールしたら、なんて返つてきたと思う？」

「いや、想像つかないけど……」

「『こんな素敵な曲と競い合えたなんて、光栄だよ！』だつてき。もう、笑つちゃつたよ」

「へえ……なんかそれつて、どういう意味で言つたんだろうね」

「大きな人だと思つたよ、あたしは。正直、このメールを送つた時のあたしはダメダメだった。悪いオーラ全開のバカモノを受け止めてこんな朗らかな返事が出来る太陽みたいな人に、あたしはなんて恥ずかしいことしてるんだと思つたりしてき」

「……そつか。なんか、珠ちゃんにもそういうときあつたんだね」

「いまもその最中だと思つてるけどね。なんかこう、あたし色々勘違いしてたなつて思つてね。それからあたしは、いろいろ悩んだけど高校もいくことにして、今に至るつてわけ」

「そつかあ。人に歴史ありだなあ。でも、そのとき珠ちゃんがコンペ通つてなくて良かったかも」

「え、そう？」

「だつて、もしかしたら高校きてなかったかもし

れないんでしょ？ だったら、きつと私達会えなかったんだろうなって」

「……ああ、それはまあ、もしかしたらそうかも知れないな」

「珠ちゃんからすると寄り道みたいなものかもしれないけど、珠ちゃんが寄り道してくれたおかげで私は作曲が好きになったんだ」

「おお……いろはお前、なかなか恥ずかしいことを言うじゃないか」

「ええ！？ 恥ずかしいかな今の！？」

「いや、あはは。いや、ちよつとビククリして」

——いろはが今言った言葉は、奇しくもあたしが、いつか先生から言われたことと同じだった。

人生の寄り道は、寄り道こそが本道である。短い距離でゴールすることばかりが大事なのではない。長い長い寄り道をしてゴールをすることもまた、同じくらい大事なことである。みたいな話。「ふいに本質的なんだよなあいろはってやつは」

「え、そうかな？」

「もしかしたら、いろはに会うためにあたしは高校に通ったのかもしれないな」

「え。珠ちゃんの方が恥ずかしい感じじゃないそれ？」

「ええ！？ 恥ずかしいかな今の！？」

「……あ、珠ちゃん、さては若干私のことバカにしているね？」

「あはは！ そんなことないぞ！ あたしは常に本音しか言わないからな！」

あのときコンペに落ちてよかったよ。本当に。悔し過ぎて泣いたこともあるけどさ、でも、その全部が大事なことであったと今では思えるし。

選んだ道を全部よかったって言えるかどうかは、いまあたしが何を出来てるのかで決まるんだろうなとか思うよ。わかんないけど。

今日はここまで！

あとがき

こんにちは、仰木です。今回のCOMITIA127では新作小説『トークバック』の2巻を出すつもりだったのですが、諸々のスケジュールの事情で印刷が間に合いませんでした。同作を目当てに来て下さった方がいらっしゃいましたら、申し訳ありませんでした…。原稿自体は仕上がっているので、イベント先行ではなく直でAmazon販売を開始するかもしれませんが、その際はまたよろしくお願いします！

さて、それはさておき今回の作曲少女 番外編コピー本は珠美の思い出話、『作曲コンペについて』を具体的に語る物語でした。コンペに関する質問は結構きくものでして、どこかのタイミングで少し具体的に書いてみたいとは思っていたものなので、これは良い機会だったなと書き終わってから改めて思っていたりします。もちろん、今回書いたケース以外のパターンも無数に存在するのでこれがすべてというわけではございませんが、一つの例としての追体験の物語として楽しんでいただけておりましたら幸いです。

しかし珠美を書くのは楽しいなぁ！まだまだ書き切っていない珠美についての物語も、またどこかのタイミングで書いていきたいなと思いつつ、今日はここまで、ということで(´v`)